

# 史跡名勝 平等院庭園における州浜整備

Reconstruction of *suhami* (pebble beach) at Byodo-in Temple Based on the Results of Archeological Excavation

仲 隆裕\*  
Takahiro NAKA\*

## 1. はじめに一事業に至る経過と実施体制

平等院は平安時代の後期、永承7年（1052）に創建された。この年は仏の教えが空しくなる「末法」の世がはじまるとされていた年である。貴族たちは極楽へ往生を遂げることを願って阿弥陀如来を安置する仏堂を建て、その周囲には美しい池庭を整えた。このような庭園を「浄土庭園」と呼び、平等院の庭園はその代表的存在である。

しかし、平等院庭園の意匠は創建当初からは大きく変容していた。そこで宗教法人平等院は創建950年を迎える平成14年を目標として庭園の意匠を往時の姿に復元すると同時に、寺宝の修理、老朽化した宝物殿の建て替え、防災施設の整備を完成させようという一大プロジェクトに取り組むこととなった。平成2年から学識経験者を含む整備委員会が組織され、庭園遺構の残存状況を調べるためトレンチによる試掘調査が宇治市教育委員会によって行われ、その結果創建当初の遺構が良好に残されていることが判明した。平成3年度からは文化庁国庫補助事業に採択され、平成6年度からは中島周囲の面的発掘調査が順次すすめられた。

これらの成果に基づき、委員会では整備基本計画を策定し、平成10年度から実施設計・施工が進められている。なお造園分野からの整備委員会メンバーは村岡正（庭園文化研究所所長：故人）・

中村・（京都大学名誉教授）、牛川喜幸（京都橘女子大学教授）の各氏である。

また、発掘調査の成果を設計および施工に反映させるため、京都造形芸術大学日本庭園研究センター（所長：尼崎博正）が州浜整備の指導にあたることとなり、主として筆者が担当するほか片石高幸研究員が現場監理を担当した。

ここでは平成10年度に施工された鳳凰堂前面部（東）における州浜整備について報告する。

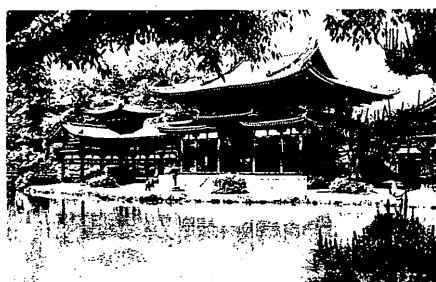
技術的な特徴は（1）発掘調査の成果を設計に反映させ、平安期の庭園意匠（州浜）の忠実な再現をめざしたものであること、（2）特に粘土や州浜を構成する石材について、同質の資材を調査・探索し使用したこと、（3）盛土の工程において、石列区画盛土技法という平安期の造園技術の復元工法を採用したこと、の3点に集約される。

さらに施工監理にあたっては、発掘調査担当者が常時現場に立ち会い、図面では伝わりにくい発掘遺構のもつ雰囲気再現性を高めたことが特筆される。

## 2. 発掘調査の成果概要と整備方針

### （1）検出された遺構

宇治市教育委員会（現：宇治市歴史資料館）による8年間におよぶ調査の結果、創建期には中島の周囲や対岸に宇治川から採取した礫を流麗に敷



（上）写真－1 昭和60年頃の  
平等院庭園（村岡正撮影）



（右）写真－2 発掘された州浜  
遺構（平等院提供）

\* 京都造形芸術大学日本庭園研究センター

\* Kyoto university of Art and Design Research  
Centre for Japanese Garden Art

き詰めた州浜が存在したことが明らかにされた。鳳凰堂と呼ばれる阿弥陀堂の南北ふたつの翼廊は当初この州浜に柱をたてて水中楼閣の様相を呈していたようであるが、のちに基壇が設けられ、これに打ち寄せるように州浜がとりつく。池底は鳳凰堂の南西部が最も高く、ここに湧き出す水は一旦ためられて二つの堰から流れていく。ひとつは尾廊付近で音をたてて落ち、中堂と北翼廊の背後を流れる。いまひとつは南翼廊の脇を静かに流れる。

中島の周囲の州浜は宇治川の河原石を敷き詰めたものである。石の大きさや形状は水流の上流部では大きく荒く、下流にあたる鳳凰堂前面部では丸みを帯びた扁平なものが大きな割合を占める。これは水位の変化によってあらわれる浅瀬や背落ちの姿ともども自然の河川の州浜の様子を現しているようであり、現在も宇治川の中にこれらとそっくりな意匠を目にすることがある。州浜に使用される河原石の石質は砂岩・頁岩・チャートが主でその構成比は鳳凰堂前面部でおよそ5:4:1となっており、一定の割合で使用されていることから、その意匠設計が綿密であったことが窺える。特に色目石と呼ぶ赤色チャートが均等に蒔かれていることは特筆されよう。

## (2) 整備の基本方針

水位を含め境内全域が平安時代の生活面より高くなっている現在、往時の遺構を露出させようとすれば境内全域の地盤を下げなくてはならず、その排水が接続する灌漑用水をも改修する必要が生じてしまう。平安期の遺構の上部に残存する中世の遺構を保存することも考慮され、結論として遺構を埋め戻し、その直上に平安期の州浜を再現するという整備方針が整備委員会によって決定された。整備地盤高は遺構面プラス40cmを基本とし、州浜の勾配や汀線を極力再現し水の流れも整備すること、翼廊には基壇を復元することとなった。

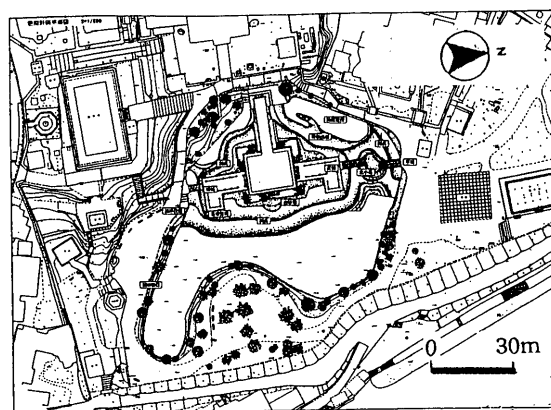


図-2 整備計画概念図

今回の整備事業では中島周辺の州浜を中心に整備し、阿字池の形状復元は今後の課題とされた。

## 3. 施工の基本方針

整備設計が発掘調査成果に基づく往時の意匠再現にあるならば、施工技術においても往時の工法を研究し、可能な限りその再現をめざす。施工の指導を担当するにあたってこのことを基本方針とした。また、州浜を構築する資材として、河原石や粘土もオリジナルに近い素材を採用する、ということも基本方針とした。

橋俊綱は『作庭記』の編著者である可能性が高い。そうだとするならば、彼は平等院の創建者である父・頼通が陣頭指揮に立っていたという高陽院庭園の現場を目撃していたことになる。先に述べた宇治川の風景描写や州浜における石遣いなどは『作庭記』の記述と合致しているように思われるし、また阿弥陀堂の基礎地業は高陽院においても採用されていた工法と共通の技法である。従って、平安期の遺構を埋め戻して州浜をつくるなら、発掘調査で確認されている高陽院やこの平等院を模して造営されたという鳥羽離宮勝光明院の州浜の構築技法を採用すべきである、と考えたのである。

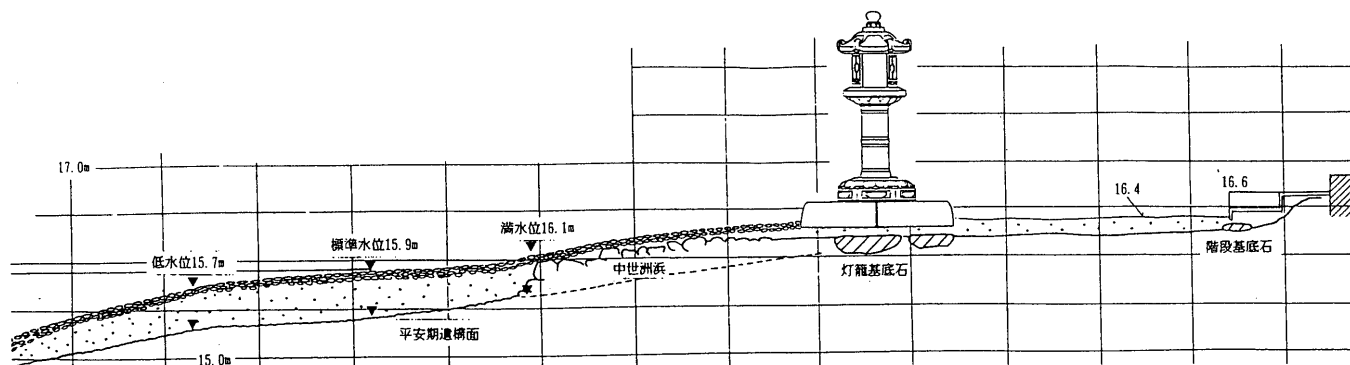


図-1 中堂正面部の整備計画断面図

今回整備した州浜は、平安期遺構の上方40cmの位置に当時の起伏を極力再現する。盛土による建物との比較差は平坦部で吸収させる。なお、往時から水位は変動していたようだ。今回も水位変動による州浜意匠のみえがかりの変化を想定している。

#### 4. 版築による盛土

盛土においては高陽院庭園や鳥羽離宮勝光明院の州浜における版築工法を参考に施工した。それは人頭大の石で短冊形の区画を設け、ここに砂質土と粘質土とを交互に尽き固め層状に盛り上げていくというものである。考古学ではこうした工法は工事範囲の割り当て範囲を示すものであるとの説があった。そのようなケースもあろうが、試験施工の結果、石列が徐々に高く壁状に積み上がることによって土の締まりが堅固になるという効果が確認されたことから、整地の技法であると推論した。この技法を「石列区画盛土技法」と名付け、州浜整備範囲全域で採用した。なお、試験施工にあたっては（財）京都市埋蔵文化財研究所調査課長の鈴木久男氏に御指導いただいた。

#### 5. 州浜に使用した石材と張り付け用粘土

高陽院の州浜は礫を粘土で張り付けたものであったが、平等院の州浜は更に巧妙である。まばらに打ち込んだ礫の間には小砂利を叩き込み、その上に礫が敷き詰められている。厚みのある州浜はしっかりと輝く礫のすき間にやわらかな光を導き、なんとも雅びやかな雰囲気醸し出す。浄土の創出にかけて意匠を深めた頼通の研鑽のあとを窺いすることができる。

このような効果を引き出すには、勾配の設定に加えて礫や小砂利の形状と質感が決め手となる。現在宇治川の礫は採取禁止となっているが、ちょうどこのとき、境内の宝物館の建て替え工事が併行して施工されており、その掘削現場から礫層があらわれ、これを選別して使用することができた。しかし礫が量的に不足したため近畿地方一円の河川を調査して最も近い熊野川流域のチャートを採取し、主として設定水位以下において使用した。

あわせて採取した粘土も分析の結果、当初造営時とほぼ同質のものであったためこれを使用した。この粘土は乾燥しても体積変化が少なくひびわれが生じにくい。また、叩き締めると水に溶けにくく撥水能力も著しいものであった。

#### 6. 庭園の構造と地下水脈

遺構の忠実な再現を目指した結果、多くの事を学ぶことができた。もっとも驚くべきことは自然環境との関係である。平等院は宇治川に臨む微高地に位置している。西方浄土をたたえる立地計画であることはよく知られているが、これは単に形態の問題だけではない。微高地は洪積世の礫層と粘土層とが交互に堆積する地山である。これを掘削して池を作り、掘り残した部分に土を盛り上げた中島に鳳凰堂が建てられているのであるが、州



写真一 3～9 州浜の整備工程

(上から写真 3,4,5,6)

(次項上から写真 7,8,9)

整備工事には常に発掘担当者が立会い、遺構面の起伏やその醸し出す雰囲気再現に協力してくれた。



- 写真—3 遺構面をシートで保護し、石列で区画する。  
砂質土層と粘質土層とを交互にタコで叩いて設ける。
- 写真—4 最上層に木槌で粘土を打つ。
- 写真—5 人頭大の石を打ち込む。土は更に締まる。
- 写真—6 小砂利を叩き込み、その上に河原石を敷き詰めてゆく。人頭大の石が河原石の転落を防ぐ。
- 写真—7 石列区画ごとに工事の進捗状況が異なっていることがわかる。中央部に残された遺構を常に参照しつつ州浜整備を進めているのである。
- 写真—8 州浜整備の最終段階。中堂の周囲には外護石が巡る。往時と同じく二上山産の凝灰岩をノミで加工した。伝統工芸士西村金造・大造両氏の手による。
- 写真—9 整備後の州浜。池底に砂をいれて好気性プランクトンを培養し、水質の向上をはかっている。

浜の一部は洪積世の礫層を活用していると推定されるのである。庭園の水源は宇治川ではなくこの礫層を通して湧出する後背丘陵からの地下水であり、州浜の一部は意匠のみならず給水装置だったと考えられる。湧水は「阿弥陀水」「法華水」などと命名されているように聖なる井戸とされ、まさに仏の恵みをもたらすものといえる。この湧水への畏敬の念こそが平等院という寺院の本質であったとさえ考えられる。

立地の環境を巧みに活かした計画、土や石といった素材の選択眼の高さ、堅牢な土木技術、そして醸し出された美の世界の崇高さ。これらは藤原頼通がこの平等院の造営にいかに全力を傾注していたのかを物語っている。

庭は一定区域の土地の上に構築されるものであるが、山や川、清浄な空気に水、いきいきと育つ動・植物など、すばらしい自然の恵みがあってこそ存在しうるものといえよう。庭そのものとこれを支える環境を維持してこそ、歴史的庭園は時代をこえて現代に生きる私たちにそのメッセージを伝えてくれる。その意味で、庭園修復は環境修復と同義であると言えるかも知れない。

平等院の湧水量は、後背地の開発や近年大量に行われている工場揚水その他の要因によって極端に遡減している。平成14年度は現在の地下水脈からの取水に取り組んでいるが、今後は集水域全体を視野に入れた取り組みが必要となることを付記する。

謝辞:本事業に関与する機会を与えていただいた宗教法人平等院はじめ、すべての関係各位に御礼申し上げます。末尾ながら、高陽院跡や鳥羽離宮跡の発掘現場でご教示いただいた故・村岡正先生および故・杉山信三(財)京都市埋蔵文化財研究所所長に黙祷を捧げます。

- 名称 : 史跡及び名勝平等院庭園保存整備事業
- 所在地 : 京都府宇治市宇治蓮華116番地
- 事業主体 : 宗教法人平等院(文化庁国庫補助事業)
- 指導 : 文化庁、京都府、宇治市、史跡名勝平等院庭園整備委員会
- 実施設計 : (株)パーク総合デザイン/(株)空間文化開発機構
- 施工指導 : 京都造形芸術大学日本庭園研究センター
- 施工 : (株)花豊造園/平安林泉/寺崎造園
- 施工期間 : 平成10年4月~平成15年2月(予定)